

鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語

図録

【第十三集】伊勢物語の
注釈書写本(Ⅱ)



鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語図録



【第十三集】伊勢物語

江苏工业学院图书馆
藏书章

鉄心斎文庫 伊勢物語文華館

目次

ごあいさつ……………芦澤美佐子……………	4
伊勢物語注釈書の世界(Ⅱ)……………山本登朗……………	6

一……………伊勢物語闕疑抄……………	8
二……………伊勢物語闕疑抄……………	10
三……………伊勢物語之注(伊勢物語闕疑抄)……………	12
四……………伊勢物語闕疑抄……………	14
五……………伊勢物語闕疑抄……………	16
六……………伊勢物語闕疑抄……………	18
七……………伊勢物語注……………	20
八……………伊勢物語抄……………	22
九……………伊勢物語(紹巴本伊勢物語付注)……………	24
十……………伊勢物語愚案抄……………	26
十一……………伊勢物語聞書(後水尾院御講釈聞書・明暦二年具起聞書)……………	28
十二……………伊勢物語勅講抄(後水尾院御講釈聞書・明暦二年具起聞書)……………	30
十三……………伊勢物語勅講抄(後水尾院御講釈聞書・明暦二年具起聞書)……………	32
十四……………伊勢物語聞書(後水尾院御講釈聞書・明暦二年具起聞書)……………	34
十五……………伊勢物語聞書(後水尾院御講釈聞書・明暦二年具起聞書)……………	36
十六……………伊勢物語御講(後水尾院御講釈聞書・明暦二年雅章聞書)……………	38
十七……………伊勢物語聞書(真如蔵旧蔵)……………	40
十八……………伊勢物語要見抄(清水泰氏臨写本)……………	42

十九	伊勢物語拾穂抄(初度本)	44
二十	根頭葉知抄	46
二十一	伊勢物語注	48
二十二	伊勢物語拙の説	50
二十三	伊勢物語奥旨秘訣	52
二十四	伊勢物語秘訣(伊勢物語奥旨秘訣)	54
二十五	勢語初聞藁・勢語後聞藁	56
二十六	伊勢物語為講抄	58
二十七	伊勢物語私解	60
二十八	伊勢物語増選抄	62
二十九	土佐光貞	64



●十一月の声をききますと、一だんと空気が澄んで冷たさを感じるようになりました。

●文華館も七年目をむかえ、十三回の展示になりました。今回は昨年の秋につづき註釈書の寫本を展示いたします。本文だけを書き寫した「伊勢物語」は沢山ありますが、註釈書の寫本も数多く残っております。時代が下つてくるごとに解説がひろがってゆくように思います。版本もかなり出廻っていたと思われますのに、その分厚い版本を寫したらしい寫本もあり、勤勉な学徒もいたのだと感心いたします。

●今回、後水尾院の講釈と聞書が数点出ておりますが、後水尾院は、後陽成天皇（第一〇七代）の第三皇子として、文禄五年（一五九六年）にお生れになり、慶長十六年（一六二一年）に即位され第一〇八代天皇になりました。在位十八年、のち院中（ツリナカ）で政をきかれること五十一年、延宝八年（一六八〇年）に八十五才で崩ぜられました。徳川將軍家から后をむかえられたときいております。後水尾院は智仁親王、烏丸光広、中院通村、三条西実隆などを召して、古今集や伊勢物語の講釈を聞かれたばかりでなく、御自身でも延臣を集めて、度々講釈をされたようです。その折の聞書が残っております。

●聞書一つとりましても講釈の様子など興味深いものがございます。皆様もどうぞ書かれてお

ります行間を探ぐり、お楽しみ下さいませ。



伊勢物語注釈書の世界(Ⅱ)……………山本登朗

●室町時代の中期以降、伊勢物語は、たとえば「正直」といったような観念的テーマを持った教訓的書物とされ、当時の社会思想であつた神道・仏教・儒教の立場から、物語の中に込められている「心」を深く読み解こうとする方向で読まれ続けた。現代から見れば誤りとは思えない読み方だが、これによつて当時の人々は、はじめて伊勢物語を、読むに値する有意義な書物として受容することができたのである。小説のような文学作品を読むことにはたしてどんな意義があるかという問題に本当に答えることは、現代でもけつして容易ではない。「旧注」と呼ばれるこれらの注釈の伊勢物語読解の姿勢は、物語の表現をひとまずそのままに理解したうえで、その背後に隠された主題を読み取ろうとするところに特徴を持つが、それは、文学と社会倫理という根の深い問題に対する、当時におけるひとつの解答でもあつた。これら「旧注」には、当然のことながら強引な深読みによる誤りも多く見られるが、以上のような性格を承知して読めば、その真剣な読解には、興味深い内容もまた多く見出されるのである。

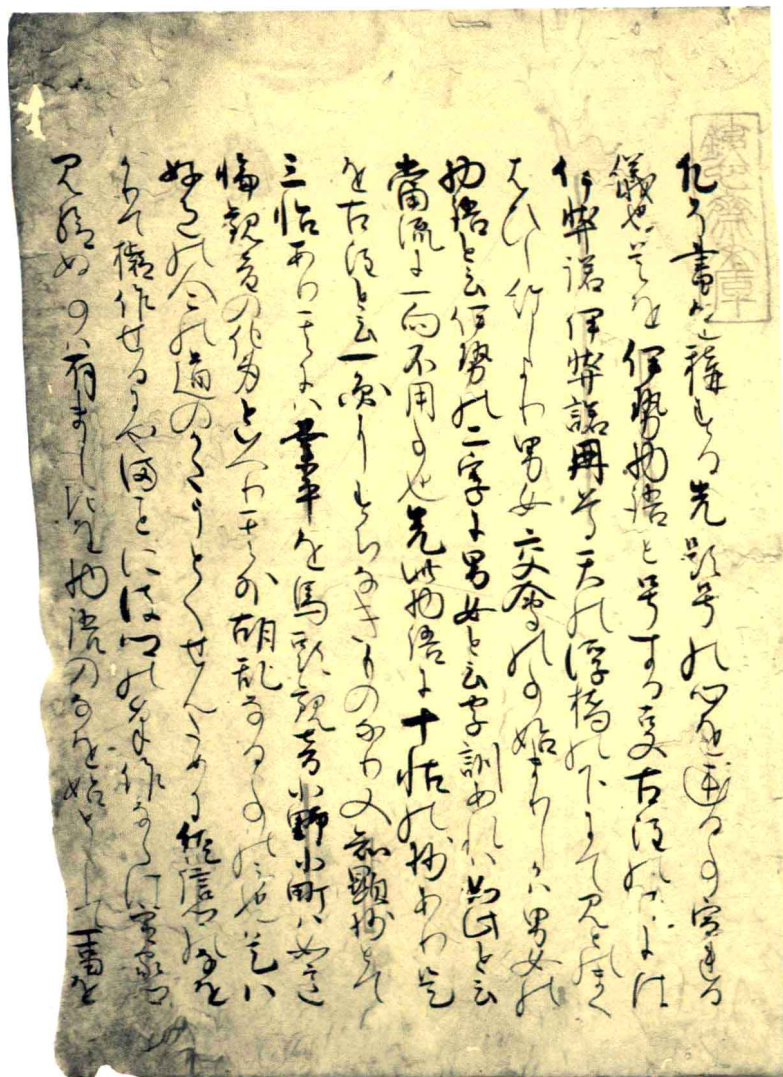
●今回展示されるのは、その「旧注」の流れを汲む、安土桃山時代から江戸時代にかけての注釈書である。宗祇から三条西実隆など多くの人々に受け継がれた二条流の歌学(古今伝授)は、やがて三条西家を経て細川幽斎に継承される。武家であつた幽斎は、上は後陽成天皇の弟で桂離宮で有名な八条宮智仁親王から、烏丸光広などの公家、下は貞門俳諧で知られた松永貞徳などまで、幅広い階層の多くの人々に伝授を伝えた。幽斎の著作である『伊勢物語闕疑抄』は現存する写本も多いが、やがて、門人であつた中院通勝などの手によつて古活字版の形で刊行され、引き続き整版本も繰り返し出版された。伊勢物語注釈の歴史の中でも、このような現象はきわめて



異例である。師匠から門人へ開ざされた形で伝えられてきた文化が、幽斎というすぐれた学者の權威のもとに社会に開放された、その意味は大きかったと言わざるをえない。

●事実、安土桃山時代から江戸時代初期にかけてのさまざまな注釈には『闕疑抄』の影響を強く受けているものがきわめて多い。前の時代であれば師匠から与えられたりしてはじめて目にすることができたすぐれた注釈書を、いまや人々は容易に入手することができたのである。また逆に、『伊勢物語集注』や『伊勢物語童子問』など、『闕疑抄』を仮想敵として批判・否定することによって自説を主張する注釈書も出現した。そこから逆に、当時の『闕疑抄』の權威の強さと幅広い浸透ぶりをうかがうことができる。それら『集注』や『童子問』が特に問題にしたのは、やはり、当時の社会思想であつた朱子学と、かならずしもそれに合致しない伊勢物語の内容の問題であつた。『闕疑抄』『集注』『童子問』のその問題に対する姿勢は三者三様で興味深いが、こうして伊勢物語の注釈は多様性の時代を迎え、『集注』は伝統的歌学の末流の人々の注釈に、『童子問』は賀茂真淵など国学者たちの「新注」に、それぞれ大きな影響を与えていったのである。

●一方、幽斎から伝授を受けた智仁親王は、甥にあたる後水尾天皇にそれを伝え、以後その伝授は代々の天皇や公家たちに受け継がれて「御所伝授」と呼ばれた。後水尾天皇は宮中で頻繁に古典の講釈や歌会を開いており、その精進ぶりには目を見張るものがあるが、それは、江戸幕府に政治の實権を奪われた天皇家と公家が、自分たちの精神的なよりどころとして和歌や古典の世界を重要視したことのあるわけでもあつた。後水尾天皇自身の伊勢物語講釈を受講した公家が筆録した数種の「御講釈聞書」の詳細で的確な内容は、そのような当時の雰囲気をよく伝えている。この時代、さまざまな階層の人々のさまざまな思いが、伊勢物語のさまざまな注釈書を生み出したのである。



一…………伊勢物語闕疑抄

袋綴一冊（もと二冊を合冊）。縦二九・三厘、横

二二・四厘。表紙は薄茶地唐草小七宝散らし綴子。見返しは金砂子散らし。題箋・外題はない。料紙は楮紙で、墨付き一八七丁、遊紙はない。安土桃山時代を通じて文武両道に活躍した細川幽斎（天文三年・一五三四〜慶長十五年・一六一〇）作。幽斎は三条西実枝に歌道を学び、その子の公国が幼かったため、三条西家代々の古今伝授を弟子として預かったが、誰にも伝授しないうちに関ヶ原の合戦が勃発、田辺城に籠城して西軍に囲まれた際、伝授断絶を惜しむ後陽成天皇の命によって囲みが解かれた話は名高い。当時は伊勢物語注釈も古今伝授の一部であり、幽斎はそれも含めた歌学を公家から町人まで幅広い人々に伝えた。『闕疑抄』も、きわめて早く版本として出版されるなど広く読まれ、江戸時代初期の伊勢物語注釈に大きな影響を与えた。本書は、後に幽斎が補足した自筆書き入れ部を頭書として有し、講釈回数などを朱筆で書いている。巻末には「幽斎、玄旨在判」とのみ記され、年時の記載はない。



[illegible]

予自涉流之能可思焉

世に名をのぼるる人あまに少くは
とてちかきころよりたてまつる

下馬見つて立ち去るおぼしき人。
 殿様と云ふと云ふと云ふと思ふ人。

此の歌は、
「あまのこゝろ」

たきまきとせうはくをくはす

一切衆生の母世々かくまふといふをまうのま

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）

萬葉の始末をあらわし元服の朝より
藤原

木

昔々とあるもいふに古の事いふまじき
今日此方よりいふの月とて昔といふは
彼處則昔をいふも昔は福人の代りの月
元昔と言ふありともありは縁端の詞を
草書に序るは古者伏羲氏之王天下也と書に昔
といふは入るなりたり源か拙考にいふ
乃月ゆゑの中夜衣をきてさすのみならず
むかしさくると同じなり世物は昔とて
よけれやむりわしは昔とて解するも

又勢也昔男と女とふふ古は乃既あり不信用也
 乃とよみあはく男とよみり男とよみり
 昔年乃乃り

三

[illegible]

三……伊勢物語之注

(伊勢物語闕疑抄)

袋綴二冊。縦二九・五厘、横二一・三厘。塗桐箱入。表紙は薄茶地葡萄唐草綴子。中央上部に銀泥下絵の題箋を貼り「伊勢物語之注上(下)」と外題を記す。見返しは本文と同じ楮紙で、墨付きは上下それぞれ八丁、九四丁。遊紙は

ともに二丁。幽齋自筆書き入れ部を頭書として有し、講釈回数などを朱筆で記している。文禄五年(一五九六)の跋文の後に、慶長七年(一六〇二)十一月十八日の幽齋の奥書を転写する。

乞ふ書と稱する先頭平付の跋述る事
定まらず也是も伊勢物語の平なる文古
伊勢物語伊勢丹守の平なる下なる
まゝなり伊勢丹守男女交會の事始り
物言はる伊勢丹守男女の交會の事
當流より不同事也先は物語小十帖の抄り
古流より一處よりちたものなり又知頭抄と
之帖ありそは伊勢丹守馬頭親を小野小町に
親音のたぬいなりそは胡龍を事のみも好
なりこのまゝなりそは伊勢丹守の事なり
根元なりや備へに物語の事作るも定家
の事なりや伊勢物語の事を名なり一



それぞれ八八、八五丁、遊紙はともに二丁。幽斎自筆書き入れ部を頭書として有するが、講釈回数などは記していない。文禄五年（一五九六）の跋文の後に、慶長七年（一六〇二）十一月十八日の幽斎の奥書を転写する。

凡そ書と讀むるに先題号の成違ふ事なるを或
は倅物語と号する事古注の説も倅倅諾
倅倅冊等といふ浮橋の下よりみえりなり
し男女交會れる娘のしるハ男女此物語を倅倅
乃二字ハ男女と云字例の違ふ所也と云高流は一向
不用事やいへば物語ハ十帖乃折あり是と古注と
云一名ハまゝなり又知題抄として三帖あり其
ハ業平と馬頭親吉小將小町ハ如常親吉此才
といふこと外胡亂なり事の違ひハ好色乃人あみ
られしことせんぬハ鍾信の名なりて擬他意
ハ由らばは筆作れハ定かたん竹お事ハ
有る一記と物語の名を以て一事も用ふるに

世間流布之本與書

熱利作と不字ハ

18

韓集

其石ハ倭梅の木の集乃文勢ニ似入る也似感集也

連糸
五判

近代以特使爲端之古所未有

此物說古今不同本稿在中

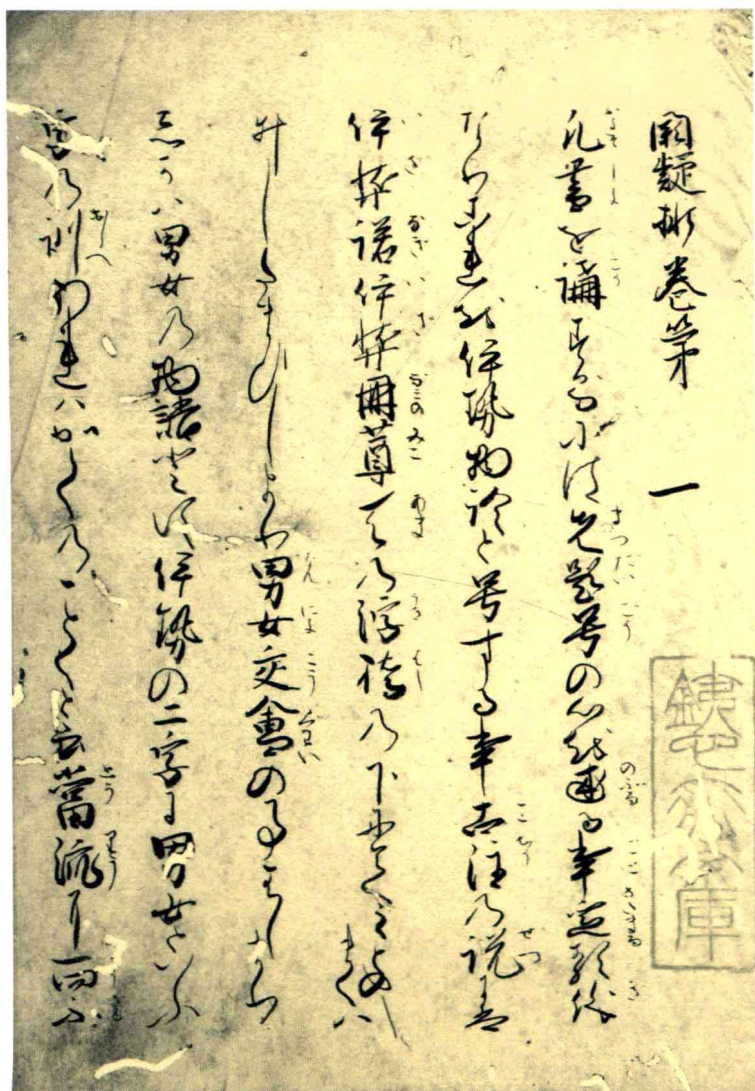
只可效詞曲言樂而已

戶部尚書

五……伊勢物語闕疑抄

袋綴五冊。縦一九・五釐、横一四・七釐。表紙は紺紙。中央に題箋を貼り「闕疑抄一（〜四）五ノ内」と外題を記す。ただし、第五冊のみ表紙を欠いている。見返しは本文料紙と同じ楮紙。墨付きは各冊それぞれ六八、六六、六九、六四、七二、遊紙はそれぞれ二、三、一、三、二丁。第五冊の末尾に転写された慶長二年十月十五日の中

院通勝の奥書の文面は古活字版の奥書に一致し、本書は、古活字を用いて慶長二年以後に五冊本として刊行された版本を写した本かと考えられる。



此兩疑所函林公彭作之工也肯登見與否云云又
有章之收侍儿下以有寬許乎雪源松邊底真忘意
外耳

